

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から⑩

本像は伊予国道後（松山市）にあった浄念寺の本尊と伝承される木造阿弥陀如来立像（総高155㍍）である。松山城を築いた加藤嘉明を輩出した加藤家ゆかりのある仏像として注目

木造阿弥陀如来立像

嘉明ゆかりの寺で安置

される。

仏像研究家の武田和昭氏は、左手首から先が欠失しているが来迎印を結ぶ阿弥陀如来像と断定。髪を生え際が下方に湾曲し、両眼に水晶がはめ込まれている可能性が高いこと、腹部の衣がたるみを持たせている点などから、全体として理知的、写実的な表現で、鎌倉時代に制作されたものと指摘する。



伊予国道後の浄念寺本尊と伝承される木造阿弥陀如来立像（鎌倉時代、個人蔵、県歴史文化博物館保管）

確認された。そこには浄念寺が伊予国湯之町（道後）に所在し、本像を所蔵していたことや、台座の作者名「助左衛門尉」などが記されており、明廓は昔のありさまを後世に示すため、旧台座の銘文を新しい台座に書き写したとある。

また文化7（1810）年に、嘉明の子孫が藩主を務める水口藩が嘉明ゆかりの松山の寺社等に由緒調査を行った際、浄念寺が提出した書き付けが残っている。それによると、浄念寺は

浄念寺は文政年間（1818～31年）に道後から木屋町に移転したとされ、戦後の昭和21（1946）年に後継の住持がなく廃寺となる。本像は縁者によって今日まで大切に保管されてきたものである。

（専門学芸員・今村賢司）

〈月2回掲載します〉

木造阿弥陀如来立像は、県歴史文化博物館（西予市）の特別展「高虎と嘉明」転換期の伊予と両雄」で26日まで展示中。